

一般社団法人ノオトへの聞き取り調査

京都府立大学文学部歴史学科 2 回生
近藤 史昭

はじめに

2014年9月2日13時30分から14時40分の間、篠山市民センターにおいて「一般社団法人ノオト」（以下ノオトと表記）の代表理事である金野幸雄氏に対して聞き取り調査を行った（写真1）。

ノオトは、篠山市において空家（古民家）の修復・活用や地域活性化の取り組みを行っている組織である。ノオトによる文化遺産活用の試みや、種々のツーリズム事業は篠山市のまちづくりを見ていく上で極めて重要な役割を果たしており、金野氏への聞き取り調査を行うことで篠山市のまちづくりについて一層深い理解が得られるだろう。また、まちづくりにおける中間組織の存在を考える上で無視できない事例である。

1 講話の内容

今回は最初に金野氏に講話のかたちでお話を聞いたのち、学生や教員との質疑応答の時間となった。

聞き取りの最初で金野氏は私たちに、福住地区における空家の修復・活用の様子をドキュメンタリー形式でまとめた映像を示した。空家の修復は、ボランティアの手によって行われたという。次に金野氏は、ヨーロッパの都市でおきたオーケストラによるフラッシュモブ演奏の映像を私たちに示した。ヨーロッパの美しい街並みの中で、音楽が演奏される映像を援用しつつ、金野氏は「楽しいことは美しい空間で起こる」と言った。この考え方が、ノオトが空家の修復・活用を行うことの

基本理念となるという。

欧米においては美しく古いまちなみが重視され、よく保存され活用されている。一方、日本においては古いまちなみを残す文化がなく、それを壊して新たな建物を建てるのが社会の発展として重視される。そのような中で、残されている古い建物などを修復し「美しい空間」に変えて、利用してみせることで価値観を変えようとするのがノオトの狙いであるのだ。

また、時が進むにつれて、文化財を修復する技術などが失われていき、文化財自体が維持できず失われていくことによって、「日本が日本でなくなる」という危機意識をもって文化財の修復・活用にあたっているという。

このような、ノオトの理念や危機意識についての話を導入として、講話はさらに具体的な内容になっていき、事前に金野氏に投げかけた質問に答える形で進行していく。質問とは「(1) ノオトの設立の経緯とその時の思いについて」、「(2) ノオトの組織とその事業について」、「(3) 集落丸山事業について」の3つである。

(1) ノオト設立の経緯とその時の思いについて

社会のニーズの多様化に伴い、プレイヤーが多様化し、NPO等の中間支援組織の重要性が増すが、日本ではそれが未熟であり、そのような中間組織の事業をビジネスとして確立させることもノオトの目指すところであるという。

もともとノオトは、篠山市の財政状況悪化に伴う行政改革の中で生まれた。行政改革の



写真1 NOTEの金野幸雄氏からお話をうかがう

中でも第三セクターの整理事業を通して生まれており、金野氏は篠山市の副市長としてその事業に関わっていた。そして、有限会社クリエイティブ篠山や株式会社プロビス篠山等の5つの第三セクターを統合し、株式会社アクト篠山と一般社団法人ノオトの2つの組織を立ち上げた。こうして、ノオトは統合以前の組織が担っていた「収益性の低い文化事業」の部分を担当する組織として、2009年2月に生まれた。このような、組織の成立は極めて特殊であると金野氏は語った。ノオト成立時の思いについては、前述したような理念や危機意識があったという。

(2) ノオトの組織とその事業について

ノオトは金野氏を含む4人の理事、1人の監事を含める11人の社員がおり、第三セクターの業務を引き継いだ指定管理事業や受託業務などにあたる臨時、非常勤の職員などを含めると78人になる。

成立の経緯を含め、ノオトは一度市が外部化して、外部化した組織をさらに民営化した

ものであるため給与も低く「かわいそうな会社」であると金野氏は語った。しかし、民営化されたことにより指定管理を行っている施設はサービスが向上するなど、民営化されることで生まれるメリットも多いという。

このような体制の下で、市民センターや歴史文化施設の指定管理業務や、文化事業として空家活用なども行っている。中でも空家活用については、従来のイベントを中心とした地域おこしではなく、文化財を利用し「楽しい空間」をつくり出しその中で様々なことを試みようとするものだという。また、2009年の篠山城築城400年祭においても、様々なシンボル事業を行った。

例えば、スローガンを決めたり、ロゴを作成したり、シンボルカラーを決めて法被を作ったりというものである。さらに、小学生に募集をかけ、「まるいの」というイノシシをモチーフにしたキャラクターとして着ぐるみなどを作り具現化した。

篠山市における400年祭では、市の外に向けて大々的に広報を行わず、外からの観光客に頼らない「市民のためのまちづくりの祭

り」としてコーディネートした。そのようなまちづくりのあり方を表すように、市民のアイデアに補助金を給付する試みを行った。その結果、市民から多くのアイデアが寄せられ、100以上の事業が市民の手で立ち上げられ現在も続くものも多い。例えば、古民家におけるまちなみアートフェスティバルや、レンタサイクル事業、市民の手による市内のマップづくりなどがある。

(3) 「集落丸山」事業について

前述のような篠山城築城400年祭を契機に盛り上がったまちづくりの動きの中で、ノオトが取り組んだ事業が「集落丸山」事業である。丸山集落は昔ながらの農村の景観を色濃く残し、ノオトが行おうとしている事業に利用できる「地域資源」が多い。しかし、12棟のうち7棟が空家となった限界集落であった。

この丸山集落において、空家となっている7棟のうち、3棟を修復して農家民宿として作りかえようとしたのが「集落丸山」事業である。「集落丸山」事業を行うにあたって、地域住民と半年で計14回のワークショップや勉強会を重ねた。その結果、「丸山集落を日本の暮らしを展示して体験する場所にしよう」という共通認識を得て、これをもとに事業を進めたという。そして、2009年に3棟の空家を無償で借り受け、地域住民が「集落丸山」というNPOを設立し、ノオトと共にLLP（有限責任事業組合）を設立し共同事業で10年間農家民宿を経営する事業を立ち上げた。集落の人々は宿の運営を、ノオトは建築士や料理人などの専門家の招へいや資金の調達などを行うというような役割分担のもとに事業は行われた。

一泊二食付で3万円という料金設定であるが、宿泊する人は多く年間2千万円ほどの収益があるという。集落に多くの人が呼び込めるわけではないが、集落のなかでお金が循環し地域が活性化するという仕組みである。

空家の修復においては、なるべく空家が建てられた時代の様式に忠実に行う。しかし、トイレや浴室は観光施設であることを意識して、現代のものに作り替えるという。さらに、

古民家の蔵を改装しフレンチレストランを作り、地域でとれた食材を使用した料理を提供する。このような施設を作り農家民宿とすると同時に、地域資源や地域住民の力を生かした様々なイベントを催した。例えば、集落の住民による注連縄作りのワークショップや、結婚式、鹿祭りとして鹿料理を供するイベント、藁ぶき屋根を葺くワークショップなど地域の力を最大限に生かしたものである。

また、ノオトは丸山集落を契機として他の限界集落でも地域活性化事業を行っている。ノオトの空家の活用については、建築年代に忠実な修復ということ以外にもこだわりがあるという。それは、なるべく多くの空家を活用しなおかつ事業として成立させるために、利用目的に合わせていかにリーズナブルに修復するかということであるという。

ノオトは空家を修復するだけではない。空家と空家を使いたい人とをマッチングする「中間支援」についても力を入れているという。事前に投げかけた質問に対する答えは以上のようなものであった。さらに、講話は続く。

金野氏は文化財の活用事業を続けていくなかでノオトなどがおこなう、文化財を積極的に活用するような試みは、各所において、まだ十分には浸透していないと語った。文化財活用を行う上で、「文化財を活用して残す」という考え方がまだ十分に認知されていないことはノオトが抱える課題の一つである。

また、篠山市のような地域の生活文化を生かしたまちづくりを目指す試みは、全国的なネットワークを形成しており、ノオトもそのネットワークに加わっているという。ユネスコ創造都市ネットワークなど、文化多様性を認め奨励する世界的な「創造都市ネットワーク」の動きを背景に、日本においてもCCNJ（創造都市ネットワーク日本）というネットワークが生まれ、ノオトと篠山市もそのネットワークに参加している。創造都市の動きの中で、ノオトが行うことはその土地の建物を使い空間を作り、そこに地域の食文化・生活文化を持ち込み表現することだという。これを、ビジネスとして展開することで地方に人を呼び込み更なる産業を生み出し、地域を内発的な力で活性化させることが狙いであ

るという。地域の暮らしの文化を生かし、一過性の地域活性化でなく、持続的な地域活性化をノオトが行おうとしているのである。

さらに、「創造都市」・「創造農村」ということについても金野氏は独自の見解を持っている。金野氏は「創造」を職人が仕事として自らの技術で自らの魂を表現し続けることであると語り、それが起きる場所が創造都市・創造農村だという。本来、創造都市・創造農村は芸術が持つ創造性で地域の問題を解決しようとするものであるが、金野氏が重視するのは地域に根付いている生活の文化の営みである。

最後に金野氏は、これからのノオトの事業について話して下さった。今後ノオトが展開しようとしている事業は以下のようなものである。

- ①歴史的建造物を利用した篠山ホテル構想
- ②食と器の国際ビエンナーレの開催
- ③ポザーダ・ジャパン事業の展開
- ④中間組織ネットワークの設立
- ⑤職人学校の設立

どれも、ノオトや金野氏の理念を色濃く反映した事業となっている。特に金野氏は職人の育成の重要性を強調し、職人がいなくなってしまうと日本が日本でなくなってしまうと語った。

このような講話の後、質疑応答を経て聞き取りは終了となる。以下は、質疑応答の内容である。

2 質疑応答

(1) 団体名の表記について

最初に、「一般社団法人ノオト」と「一般社団法人 NOTE」の表記はどのように使いわけているのか、という質問があがった。金野氏からは篠山市が掲げるビジョン「農都」がもとであり、カタカナ表記の場合は音を重視して「ノオト」と表記し、英語で表記する場合は、記録するなどの意味を込めて「NOTE」としているという回答を得た。

(2) ノオトの組織について

ノオトの組織の性質について、いくつか質問が行われた。

ノオトの事業は行政から完全に独立したものであるのかという質問に対しては、民間の公益法人として、行政とは公民連携の形をとっており、空家の修復・活用に関しては、補助金をとる場合はあるが、ノオトの発案・企画による自主事業に近いという回答を得た。

また、篠山市においてさまざまな組織が古民家再生をしているが、その役割の違いは何かという質問があがった。金野氏はそれぞれの組織は、古民家再生の目的や手法がことなっているため、その違いによってそれぞれの価値があると答えた。

金野氏の副市長時代には、篠山市においてノオトが行うような試みができなかったのかという質問もあがった。それに対して、金野氏はノオトが行うような事業は、制度的には行政でも可能であるが、組織構造などの様々な問題あり実現することは難しいと語った。

(3) ノオトの事業について

ノオトの事業に関してもいくつかの質問があがった。ノオトが空家の修復・活用において重視する点は何か、という質問に対して空家の意匠や特徴をできるだけ生かすことと、空家の経年による風合いを生かし、コスト削減の工夫をすることであるが、活用にあたって利用しやすいように改修する場合もあるという回答を得た。また、建築基準法などによる制限などの問題もあるという。

さらに、ノオトが展開する農村における人々の生活を軸にする観光事業において、苦勞することはなにかという質問があがった。金野氏は農村における観光事業はまだ手探りの状況で、リスクの基で行われていること、自分たちがパイオニアであるため、失敗した場合生きた建築物が残せないとみなされてしまうことが苦勞であると語った。

ノオトの事業の中でも、特に「集落丸山」事業について、いくつかの質問がなされた。

最初に、短期間で住民の意見をまとめられた背景について質問があがった。それに対しては、住民の自主性によってまとめられた事業が大きく、14回に渡るワークショップでまとめることは苦勞しなかった。しかし、宿泊業に関するノウハウがノオトにも住民にもなかったため、話し合いで仕組みを作り上げていく苦勞があったという。

この回答にたいして、さらに、「集落丸山」の構想はゼロの状態から地域住民の手によってつくられたのか、それとも事前にノオトが持っていた構想を住民に伝えたのか、という質問があがった。この質問に対しては、ノオトはもともとそのような構想を持っていたが、今の「集落丸山」の形式は住民たちの手によって選び取られた、という回答を得た。

(4)「歴史」の知識の重要性について

ノオトのような組織によるまちづくりにおいて大学で学ぶような「歴史」の知識はどの程度重視され、どのような役割を果たすのか、という質問が行われた。

金野氏はその質問に対して、「歴史」の知識はどこから話していいのかわからないくら

い重要である。ノオトは歴史や文化の素晴らしさを存分に表現できるような空間づくりを行っており、そのような空間において活躍し得るのが歴史の知識をもつ人間である。また、文化財活用のための新たなルールづくりにおいて文化財の価値を知る人物の存在は必要になると語った。

おわりに

聞き取りを通して、ノオトが篠山市のまちづくりにおいて非常に重要な役割を果たしていることが分かった。中間組織として、様々なものを仲介する役割は篠山市のまちづくりを一層活性化させているように感じた。今後、ノオトが行うような地域の文化財に光をあて、それを生かそうとする動きや、それを行う組織は一層増加していくのではないだろうか。

【謝辞】

最後に、貴重な時間を割き一般社団法人ノオトの活動について話を聞かせてくださった、一般社団法人ノオトの金野幸雄様、田中豊茂様に感謝の意を表します。ありがとうございました。